

# 中国社会文化学会 2017年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会文化学会 Tel:03-5841-3746, Fax:03-5841-3744, E-mail:shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（シンポジウム資料代）1,000円 非会員の来聴歓迎

## 2017年7月8日（土）自由論題報告

### 第一会場 1番大教室 13:30~16:40

司会：小島 毅（東京大学）

黄裳の人材論

……………梶田 祥嗣（経済産業省非常勤職員）

コメンテーター：小島 毅（東京大学）

易学の「復古」：宋元中国と江戸日本

……………廖 娟（東京大学大学院生）

コメンテーター：高山 大毅（駒澤大学）

漢訳教理問答『天主聖教啓蒙』の研究——明末天主教布教実態の様相

……………王 雯璐（東京大学大学院生）

コメンテーター：井川 義次（筑波大学）

### 第二会場 2番大教室 14:35~16:40

司会：吉澤 誠一郎（東京大学）

貴州高坡苗族の「敲牛祭祖」について——高坡郷一帯を中心に……………張 勝蘭（早稲田大学）

コメンテーター：大木 康（東京大学）

同治年間における吏治と吏務

……………早丸 一真（東京大学大学院生）

コメンテーター：平野 聡（東京大学）

### 会員総会 17:00~17:30 1番大教室

## 2017年7月9日（日）

### シンポジウム 中国近世の出版と社会

#### 1番大教室 10:00~17:00

#### 午前の部：10:00~12:15

南宋の詩文と出版——作者・読者・注釈をめぐって——

……………甲斐 雄一（日本学術振興会特別研究員PD）

明末における「章回」小説の定着と商業出版

……………上原 究一（山梨大学）

コメンテーター：金 文京（鶴見大学）

#### 懇親昼食会 12:15~13:30 (2番大教室) [会費1,000円]

#### 午後の部：13:30~17:00

江戸期における『聖蹟図』の出版について

……………永富 青地（早稲田大学）

江戸期における漢籍の重版・類版——『杜律集解』と『唐詩選』の文運東漸——

……………有木 大輔（筑波大学附属駒場中・高等学校）

コメンテーター：鈴木 俊幸（中央大学）

総合司会：陳 捷（東京大学）

総括討論

◆自由論題報告 第一会場 7月8日(土) 13:30~16:40 1番大教室

◇ 黄裳の人材論

梶田 祥嗣

〔報告要旨〕本報告は北宋後期の士大夫である黄裳(字冕仲)の人材論について思想的観点から検証を試みるものである。報告者はこれまでに、黄裳が王安石門下と政治・思想方面に涉り密接な関係を築きながら、王安石の学によって自己の思想を開陳したことを論証してきた。一方で黄裳は蔡京による三舍法を指弾しており、一見その思想と行動は矛盾するように感じられる。しかしながら黄裳の官僚養成論を子細に分析すれば、黄裳は王安石『周礼義』の経解方法や思想構造を援用しつつ、制度に内在する官僚倫理を周礼思想の根幹に据えていることが確認できる。つまり黄裳による三舍法批判は制度に依存しすぎる蔡京の教育方針に向けられたものであり、その基底には官僚倫理の養成こそが制度の中核をなすという人材論が伏在しているのである。以上の観点を中心に、従来王学門下とされてこなかった士大夫による王学研究の必要性も併せて提言しつつ私見を披瀝したい。

〔報告者紹介〕梶田祥嗣(かじた・しょうじ)、1979年生。専攻は宋代思想。早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学、現在経済産業省非常勤職員。主要論文「王安石の思想における「神」の意義について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56、2011年)、「三礼諸注における「黄氏」補訂及びその周辺の問題について—黄裳を中心に—」(『論叢 アジアの文化と思想』23、2014年)。

◇ 易学の「復古」：宋元中国と江戸

廖 娟

〔報告要旨〕本報告は中国宋元時代の『周易』研究に見られる一種の「古易」思潮を紹介しつつ、日本江戸時代における「古易」現象を対照的に考察するものである。「復古」と呼ばれる宋元中国の「古易」運動が、「経を経とし、伝を伝とす」という刊行形式の問題から始まり、経と伝の関係へと派生し、さらに『易経』解釈の革新に及んだことを指摘した上で、江戸時代の『易経』に関する作品に見られる「古易」思潮を、宋元中国の復古運動の延長と位置づけることを試み、その流れを整理したい。また、伊藤仁斎・太宰春台・新井白蛾・中井履軒などの儒者の作品に対する分析を通じて、江戸時代の儒者が経と伝の関係や『易経』の性質をめぐる展開した討論、及び朱子学への批判などを提示する。その上で、思想史研究の立場から、中日の儒学史上、経典解釈において共通する問題意識の中に、異質な構想や動機が含まれていた状況を明らかにしてゆきたい。

〔報告者紹介〕廖娟(りょう・えん)、1988年生。専攻は中国易学史。復旦大学哲学院卒、中国人民大学中国哲学専攻修士。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。主要論文「曹元弼の易学三書——清末民国期の経学に関する一考察」(『中国哲学研究』29、2017年掲載予定)、「新井白蛾的易学研究——兼論江戸時代日本的易占」(『河北民族師範学院学報』第36巻第4期、2016年)など。

◇ 漢訳教理問答『天主聖教啓蒙』の研究——明末天主教布教実態の一様相

王 雯璐

〔報告要旨〕明末清初に中国にやってきた天主教の宣教師たちは、布教のため、数多くの教理書を刊行した。これらの書物は主に、中国思想との比較を通じた天主教思想の紹介書と、体系的に教義を説明する公教要理類の二種類に分けられる。従来の研究は中国思想との対話を重視する視点から、エリート向けの『天主実義』類を中心としたが、民衆向けの公教要理類に関する研究蓄積が少なかった。しかし、天主教布教の全体像を明らかにするためには、公教要理類書物及びその受容過程を究明することが不可欠である。そこで、本発表は初めて漢文で刊行された公教要理

とされる『天主聖教啓蒙』(1623年刊)を取り上げる。本書の内容や構成を分析する上では、翻訳の原本及び同時代における本書の日本語版である『どちな・きりしたん』との比較を通じて、本書の特徴を究明することを主な目的とする。これによって、明末中国におけるキリスト布教の実態をより一層明らかにしたい。

〔報告者紹介〕王雯璐(おう・ぶんろ)、1988年生。専門は中国明清天主教史。北京外国語大学中国語文学学科卒。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。研究業績として、学会報告『天主実義』の初期刊本についての考察(東アジア文化交渉学会第8回国際学術大会、2016年)、論文「日本所蔵「西学漢籍」の研究——八つの所蔵機関における調査を中心に」(修士論文、2014)など。

◆自由論題報告 第二会場 7月8日(土) 14:35~16:40 2番教室

◇ 貴州高坡苗族の「敲牛祭祖」について——高坡郷一帯を中心に 張 勝蘭

〔報告要旨〕本報告は、貴州中部苗族の代表的なサブグループである高坡苗族を対象に、彼らの祖先祭祀である「敲牛祭祖」を考察したものである。「敲牛祭祖」は高坡苗族にとって「介東」(東宏)という身分が得られ、祖先に認められる神聖な儀式である。しかし、実際に高坡苗族の主な聚居地である高坡郷一帯では、「敲牛祭祖」に対してかなり異なる認識が共存していることが確認できる。そこで報告では、このような「敲牛祭祖」の特徴と現状を考察するうえで、明清期の文献史料とオーラルヒストリー・族譜などを併せて、その成因と歴史背景も検討する。よって、高坡苗族の伝統社会の特質及び伝統文化の変遷の一端を明らかにすることを試みる。また「敲牛祭祖」における相違点も共通点も共に彼らのアイデンティティの拠り処になっている点に注目して、多様な地域性という視点から高坡苗族アイデンティティの形成とその伝統社会の変遷との関係を再考する。

〔報告者紹介〕張勝蘭(ちょう・しょうらん)、1978年生。専攻は歴史人類学、主に中国西南地域の少数民族の歴史・社会・伝統文化。早稲田大学文学研究科博士後期課程満期退学。現在早稲田大学文学学術院非常勤講師、早稲田大学長江流域文化研究所招聘研究員。主要論文:「清朝の対「苗」政策と「苗」伝統社会のリーダーについて」(『WASEDA RILAS JOURNAL』NO.4、2016年)、「浅論苗族服飾与苗族自我認同意識—清朝至民国時期的貴州為中心」(『民族学刊』第25期、2014年)など。

◇ 同治年間における吏治と夷務 早丸 一真

〔報告要旨〕夷務は洋務に比べると、中国近代史の研究において重視されてきたとはいえない。夷務は通商関係事務を意味するとされ、また、同治年間(1862~74)に夷務は洋務に変わっていったというのが大方の見方である。本報告は、同治朝の『籌辦夷務始末』に依拠して当時の夷務を明らかにしようとする研究の一環である。従来の研究では、洋務の前段階を説明するものとして夷務が取り扱われ、夷務自体の実証的検討よりも洋務以降との差異を際立たせる議論の枠組みが優先されてきたのではないかと考えられる。本報告では、同治年間の夷務を再考する一つの試みとして、夷務の中の吏治の問題を検討する。同治朝の『夷務始末』には、通商の範疇に留まらない夷務の側面がいくつか見られるが、その一つが吏治であったと考えられる。考察に当たっては、同時期の『清実録』に見られる吏治についても参照し、吏治の諸相をふまえて夷務とは何かを再検討する。

〔報告者紹介〕早丸一真(はやまる・かずまさ)、1981年生。専攻は近代中国外交史。岡山大学文学部卒。現在、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程在学。

## シンポジウム 中国近世の出版と社会

2017年7月9日(日) 10:00~17:00 1番大教室

### 企画の趣旨

宋代以降、木版印刷技術の成熟と知識階層の変化とによって、書物の生産と流通の方法は大きく変わり、知識の伝達方法とルートも大いに変化したものと思われる。木版印刷を中心とした出版業の隆盛は、情報の伝達、知識の形成、文学・思想の発展にさまざまな影響を与え、政治、社会の動きにも深くかかわっていた。そのような意味において、中国近世の印刷史・出版史の研究は、技術史・書誌学などの分野のみならず、中国近世の文学・思想を含む文化全般、さらには社会を理解するうえにおいても重要な意義を有すると思われるのである。

二十世紀末以来の大規模な古典籍の影印出版、あるいはデジタル画像の公開などに伴い、社会史・政治史・文化史などの分野からのアプローチが進められることによって、書物の歴史は文化的環境、書物の生産と流通、情報・知識と政治・経済との関係、読書史や読者論など、さまざまな角度から捉えられるようになってきている。中国書籍史に関する研究は、長い歴史をもつ目録学・校勘学などの伝統的な学問の豊富な蓄積を吸収しつつ、新しい展開を迎えているのである。

今回のシンポジウムにおいては、以上のような研究背景を踏まえ、中国近世における文学・思想関係の書籍の出版と流通とに焦点を当て、宋代以降の書籍出版が文学・思想にもたらした新しい変化について議論していただきたい。作品集の編集・出版・流通過程における、書肆・作者・読者、三者の関係はどのようなものであったのか、商業出版は新しい文学ジャンル形成にどのような影響を与えていたのかなどの、中国近世の書物出版の諸相に関する具体的な分析により、中国近世における書物の成立・生産・流布の歴史と、その文化的な意義を改めて考えてみたい。一方、江戸時代における漢籍・準漢籍の出版と流通の問題にも取り上げ、孔子の生涯を絵入りで解説した『聖蹟図』や、『杜律集解』、『唐詩選』などの具体的な事例についての考察を通じて、庶民に対する儒教普及における出版の役割および近世日中の著作権・著作権に対する意識の相違点などについても論じてみたい。

### 報告要旨

午前の部 10:00~12:15

南宋の詩文と出版——作者・読者・注釈をめぐって——

甲斐 雄一(日本学術振興会特別研究員 PD)

中国文化史・文学史において、宋代を近世の開幕とすること、そしてそこに出版文化の隆盛が大きく影響していることに異論はあるまい。出版文化を背景に宋代の文学作品について考えるとき、重要なポイントとなるのは読者の存在であろう。例えば蘇軾や陸游などの当時既に高名な文人の詩は書肆によって刊行され、文人はそれに対して自ら詩集を編集し、刊行した。これは、読者の受容が膨らんだことが、作者に自撰集を編集・刊行せしめた現象だと言えよう。南宋に至って、読者数とその受容はさらに増大し、版本にもさらなる価値が付加されるようになる。その代表的な付加価値の一つが注釈である。本報告では、南宋に出版された唐宋文人の詩文集(杜甫・蘇軾・王十朋・陸游)を対象に、文学作品の

流通過程において役割を担った作者と読者の存在、その流通において大流行した注釈という編集作業について検討し、出版文化がもたらした大きな変革が、文学作品の流通をどのように浮き彫りにし、どのように影響を与えたのかについて考えてみたい。

## 明末における「章回」小説の定着と商業出版

上原 究一 (山梨大学)

白話文を用いた章回小説は、明清の通俗文芸を代表するジャンルであり、当時の商業出版における主力商品の一つとしても知られる。この「章回小説」という用語は、白話小説の研究が本格的に行われるようになった清末民初の時点で、全体を多くの章に分ち、各章に章題を付けた上で、それらを「回」という単位を使って数えるのが定番の形式であったことから付けられた呼称である。

しかし、このジャンルの黎明期にあたる明の嘉靖年間の刊本では、『水滸伝』や『平妖伝』が既にそのような形式を採っていたと考えられる反面、『三国演義』『唐書志伝』『大宋中興演義』などでは、各章に章題を付けたところまでは共通するものの、それらを「回」という単位を使って数える形式にはなっていなかった。では、「回」という単位を用いる形式は、どのような経緯で規範化したのだろうか。万暦年間にこのジャンルの刊本が南京や福建などの書坊の手で数多く覆刻・翻刻されて広まっていった過程をたどりつつ考察してみたい。

## 午後の部 13:30~17:00

### 江戸期における『聖蹟図』の出版について

永富 青地 (早稲田大学)

日本の江戸期における儒教の普及に大きな役割を果たしたのものとして、孔子の生涯を絵入りで解説した、『聖蹟図』と呼ばれるジャンルの書物があげられる。この分野の書物は、中国では童蒙の書として一流の知識人からは相手にされることはないが、日本では事情が異なっており、文之和尚(号南浦)、林羅山、山東京伝といった超一流の知識人、そして嘉休(住友政友)、嵩山房(小林新兵衛)といった特色ある書肆によって、江戸末期に至るまで、庶民に対する儒教の普及活動が続けられてきたのである。

本発表における江戸期の『聖蹟図』に関する考察が、江戸期の出版の特徴を探るうえでの一助ともなれば幸いである。

### 江戸期における漢籍の重版・類版——『杜律集解』と『唐詩選』の文運東漸——

有木 大輔 (筑波大学附属駒場中・高等学校)

『杜律集解』は寛永から元禄までの間に数多く刊行されており、芭蕉も「ひとり杜律を味ひて」いたことは周知の事実である。しかし享保以降はほとんど出版されておらず、代わりに『唐詩選』が広く読まれることになった。しかし『杜律集解』と『唐詩選』の相違は、流行した時期の差だけでなく、前者は複数の版元から刊行されていたのに対して、後者はほぼ嵩山房の独占であったことが挙げられる。そもそも江戸期の本屋仲間成立の要因の一つに八尾甚八郎と小紅屋の『史記評林』や『円機活法』の争いがあり、またその後の『楚辞王逸註』の差構いは結果的に江戸の南組の擡頭に繋がったように、近世日本の版權意識の萌芽には漢籍の出版をめぐる江戸と上方の関係が少なからず影響を与えていた。本報告では、『杜律集解』・『唐詩選』の出版状況を、享保7年11月の書籍統制令前後の本屋仲間の動向と照らし合わせて考察したい。

## 〔シンポジウム報告者紹介〕

### ◇甲斐 雄一（かい・ゆういち）

1982年生。専攻は宋代詩文及び出版文化の研究。九州大学大学院人文科学府博士後期課程修了、博士（文学）。現在、日本学術振興会特別研究員PD。著書に『南宋の文人と出版文化——王十朋と陸游をめぐって——』（九州大学出版会、2016年）が、論文に「『名公妙選陸放翁詩集』所収の陸游詩について」（『日本宋代文学学会報』第1集、2015年）などがある。

### ◇上原 究一（うえはら・きゅういち）

1980年生。専攻は中国古典文学、書誌学。東京大学文学部卒、東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）。現在、山梨大学大学院総合研究部教育学域言語文化教育講座准教授。主要論文に「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」（『日本中国学会報』63、2011年）、「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」（『東方学』131、2016年）などがある。

### ◇永富 青地（ながとみ・せいじ）

1961年生。専攻は中国思想。早稲田大学第一文学部卒、早稲田大学文学研究科博士課程東洋哲学専攻単位取得退学。博士（文学）。現在、早稲田大学創造理工学部教授。著作に『王守仁著作の文献学的研究』（汲古書院、2007年）、編著に『儒教 その可能性』（早稲田大学出版部、2011年）、編訳に『中国書籍史のパースペクティブー出版・流通への新しいアプローチ』（勉誠出版、2015年）などがある。

### ◇有木 大輔（ありき・だいすけ）

1973年生。専攻は中国古典文学。関西大学文学部卒、熊本大学大学院文学研究科修士課程修了、九州大学大学院人文科学府博士後期課程修了。博士（文学）。現在、筑波大学附属駒場中・高等学校教諭。著書に『唐詩選版本研究』（好文出版、2013年）がある。